
コイマン～鯉の恋を手伝います～

夢太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイマンと鯉の恋を手伝います

【Nコード】

N6210P

【作者名】

夢太

【あらすじ】

主人公が好きな人にフラれ落ち込んでいると、関西弁を喋る謎の鯉と出会う。その名はコイマン。彼は特殊能力の持ち主だった。

コイマン九死に一生

空は青く、目の前の川はゆつくりと水を運んでいた。

「はあ。」目に涙を浮かべながら小林弘樹はため息をついた。

弘樹は足元にあつた石をやや川上に投げた。水しぶきをあげて石は沈んでいった。

川上は弘樹の左側になる。その石が着水した場所の左側。弘樹からからみて川上の岸に近いところでバシャバシャと水しぶきが上がっている。そこは急激に浅瀬になっている所で1匹の魚が苦しんでいた。

「まったく、なにやってんだよ。」弘樹は小走りにその浅瀬に向かい、苦しんでいた魚をひよいと持ち上げると、川の深いところへ移動させてやった。

「もうこんな事にはなるなよ！」弘樹は魚に向かって大きめの声で言った。

「ありがとうございます。」

「え？」弘樹は辺りを見回した。しかし誰もいない。

「こつちです〜！」

「??」声は聞こえるのに姿は見えない。

「え!? 何? 何?」弘樹は完全にパニックになった。

「だ・か・ら・ここ! 魚!」

「え? さかな・・・?」そう言つて川を見るとかなり近くに魚がいた。

「おお! やつと気づきましたかあ。今、助けてもらった魚です。」
「・・・。」徐々に弘樹の顔が恐怖に染まっていく。

「え? ちよつ・・・! あかん! お礼言つてるだけやから! 怖がらんといて!」

「あ、ありえない・・・。魚が喋るなんて!!! うわあああ!!!」弘樹は魚に背を向けて逃げようとした。

「ストップ！！」魚の叫びに反射的に弘樹は止まった。

「お礼。お礼やから怖がらんといて。な？あと、この声は君の脳に直接届くようになってるから。」さかなは落ち着けるようにゆっくりとしたスピードで喋った。

その声を聞いて弘樹は恐る恐る魚の方へ振り返った。魚は口をパクパクさせていた。

「な？パクパクしてるだけやろ？ワイは魚やからパクパクしか出来んのよ。」そう言っつて右側のむなびれを水面に出して、弘樹に『おう』って感じの挨拶をした。

「気持ち悪っ！」思わず弘樹は心の声を口に出してしまった。

「気持ち悪っ！っつてそれはひどくないか？いくら恩人でも言っつていい事と悪い事があるわあ。」魚はしょんぼりした。

「あ・・・ご、ごめん。」

「あ、ま、まあええんですわ。とにかく助けて頂いてありがとうございます。」深々と魚は頭を下げた。下げすぎて弘樹からは尾びれしか見えなくなっていた。

「ところで、おにいさん。なんか悩んでますの？遠目からやったけど、泣いてるように見えてたからね。ワイも苦しんでバシャバシャやってましたけど、意外とねそういうの見とるんですわ。ははは。」パクパクさせながら魚は言った。声と動きが合わない為に弘樹はまだ少し混乱した。しかし、なんとか会話をしようと試みた。

「あ、まあ・・・。さっき好きな子に告白したらフラれちゃってさ。なんか、すごい好きだったから、ダメージ大きくてね。」苦笑いで弘樹は言った。

「おっ！おおー！」そう言っつて魚はとび跳ねた。

「おにいさん！丁度いいですわ！うん！恩返し出来ます！いやーお互い運がいいですねえ！」

「は？」弘樹には魚のテンションの意味が全くわからず温度差を感じていた。

「あ！すみません・・・。勝手にテンション上げてしもつて・・・。

こういう性格やから、空気読めませんねん。いわゆるKYですな。ははは。・・・あ、あかんあかん。またおかしなつとるわ。ふー・・・よし落ち着いたで。おにいさん。ワイは何に見えますかね？」

「え？魚でしょ？」

「ちやいますちやいます。種類ですわ。アユとかサケとかあるですよ。」

「ああ・・・。鯉？」

「はいきたー！正解！！そう！コイですねん！」またとび跳ねた。

「あ、はあ。」またもついていけない弘樹。

「あ、またやってしもつた。ふー・・・。おにいさん。何に悩んでましたつけ？」コイは落ち着いた感じで聞いた。

「あ、恋です。」

「ワイは？」

「鯉です。」

「そう。同じコイ。ワイなあ、恋を上手いかせる事の出来る鯉やねん。名前はコイマンって言いますねん。」

「コイ・・・マン。」なんだかよくわからない感じで弘樹はつぶやいた。

「そう。だからワイがおにいさんの恋をうまくいかせましょう。っていうてんねん。」

「え？もうわけがわからない・・・。」

「ちよっとー。もうさ、魚の声が聞こえる時点でおかしいんやからそろそろ順応して下さいよお。」混乱する弘樹にコイマンは言う。

「あ、うん。・・・確かにそうですね。」うんうんと何度かうなずいて弘樹は落ち着くように自分に言い聞かせた。

「おっ！落ち着きましたな！じゃあ、もう1度言いますわ。おにいさんの恋を上手いかせますう！」

「ほんとに？どういう事なの？」しゃがみ込んでコイマンに顔を近づけて弘樹は聞いた。

コイマン九死に一生（後書き）

3日前くらいに急に思いついたので書きました。なるべく早く続きを書きたいと思います。読んでいただきありがとうございます。

コイマンの能力

「ワイはどんなにかけ離れている2人でもくっつけられますねん。」
自慢げにコイマンは言う。

「すごい！じゃあ、木村さんが僕の事を好きになるってことも・・・」

「可能ってわけですわ！」

「やった！でもどうやって・・・？」首を傾けながら弘樹は聞いた。
「まず、おにいさんがワイの頭を触りながら自分の想いを全部ワイの中に入るように念じます。それで、相手の子にワイの頭を触らせる。すると、おにいさんが相手の子を想った分だけ、相手の子の気持ちがおにいさんに向くわけですわ。」

「つまり、僕が木村さんを想う気持ちが強ければ強いほど、木村さんは僕の事を好きになってくれるってこと？」

「いえっす！」コイマンは右のむなびれを上げた。

「でも、木村さんに君を触らせるってのがなかなか難しいなあ。」

腕組みをして弘樹は悩みだした。

「まあ、手段はなんぼでもありますやる。そんなに急ぐ必要も無いやろっし、ゆっくり考えてくだせー。」

「うん。案外魚好きかも知れないですもんね。」

「んー。それはわかりませんけどねえ。」

「じゃあ、とりあえず、ここに木村さんを連れてくればいいんですよ？」

「まあ、そういう事ですけど、1回フラれてるのに、またこんなとこに呼び出せんのですか？」

「いや・・・。その、まあ・・・。」頭をかきながら弘樹はボソボソ言った。

「ですわなあ。せやったら、水槽にワイを入れてその子の所まで持って行って下さいよ。終わったらまた此処に逃がしてくれたらええ

んで。」

「あ、なるほど。コイマンは見た感じ30センチくらいしかないし、それほど大きな水槽じゃなくても大丈夫そうですね。」

「ええ。ほな、どうしますか？もう今日やっちゃいますか？」

「えー？フラれたその日にまた呼ぶのはちょっと辛いなあ。それに、水槽も買わなきゃいけないですし。」

「あーそうでつか。じゃあ、また明日ですな。またこのあたりにいますんで、コイマンって呼んでくれはったら水面まで来ますんで。」

「あ、コイマン。質問していいですか？」右手を少し上げて弘樹は質問した。

「あ、何ですか？」コイマンは全身を傾けた。

「コイマンの声って僕以外の人にも聞こえるの？」

「ワイを触った人だけにしか聞こえまへんし、ワイが声を届けたい相手にしか聞こえまへん。」

「なるほど。じゃあ、もう1つ。過去にコイマンは何組もカップルを成立させてるんですか？」

「せやなあ。ワイは過去には1組だけですね。うちの家系は先祖代々恋に悩む人の手伝いをするんですわ。こないだまでは親父が頑張ってたんですけど、台風で増水した時に陸に上げられてしまったので、それまで全く何もしてなかったニートのワイやっただけ、受け継ぐ決意をしたってわけです。」

「あ、ごめんなさい。」

「あーそんなんにせんで下さい。事故なもんで。」

「・・・うん・・・。あ、それで、その1組はどうしてるの？」

「わからんです。カップルを成立させるともうワイと話が出来なくなります。というか、お互い見えなくなるんですわ。ワイはカップルが見えなくなるし、カップルもワイが見えなくなる。だから、うまくいって、水槽を見た時に空っぽに見えても、しっかり川にかえしてくださいね。」

「うん。わかりました。じゃあ、また。あ、そうだ、もう1つ！ど

うして関西弁なんですか？」

「それは、昔からずっと関西弁やったからわからんです。爺さんも関西弁やったんで。」

「そっかあ。じゃあ、今度こそ帰ります。また明日！」笑顔で弘樹は帰って行った。

「最初とはえらい違う顔やな。まあ、喜んでもらいたいわけやしええんやけどな。」口をパクパクさせながらコイマンは川の深くへ潜っていった。

コイマン水槽移動

翌日の夕方、弘樹は昨日と同じ場所へやってきた。

手には水槽を持って。

「コイマーン。」話し声程度で弘樹は呼んでみた。しかし、コイマンは現れない。

「あれ？おかしいなあ……。コイマーン！！」大きな声で呼んでみた。

「なんやなんや！大きい声で。びつくりしますがな。」コイマンは両方のむなびれを左右に動かし、弘樹に訴えた。

「いや、だって普通の声で呼んでもコイマン出て来なかったんで。」

「あ、そうでつか？いやゝすんません。ちょっとフナと喋ってたもんで。気の合うやつやからついつい熱中してしまいますねん。」

「まあいいですけど。出てきてくれましたし。」水槽を地面に置きながら弘樹は言った。

「あ、その水槽で意中の子の所へ行くんですな？」

「うん。よろしく頼みます。コイマン。」

「はいな。ほなゝまずは、水槽に移る前に、おにさんの気持ちをワイに入れてもうていいですか？やっぱり水槽は息苦しくなりますんで、少しでも水槽の中にいる時間を短くしたいんですわ。」

「わかった。」

「ありがとうございますう。ほな、気持ちが整ったら言うて下さいね。」コイマンは岸に近づいて、弘樹の手の届く位置まで移動した。水面にコイマンの頭だけが出ている。

「……。うん。大丈夫。」弘樹はしゃがみ込んでコイマンを見ながら言った。

「おゝえらいはいいですなあ。ほなやりましょか。手を頭に乘せて気持ち全部入れてください！」

「うん！」そう言うつと弘樹は目を閉じて、右手の手の平をコイマン

の頭に乗せ木村への想いを全部コイマンに注ぎ込んだ。

「むむむ」。はいオツケーです！いや、おにいさん、このくらいの気持ちがありましたら絶対成功出来ますわ！」ものすごい口をパクパクさせながらコイマンは言った。

「ほんと！？やった！」

「ほな、さつそくその子の所へいきましょか。」

「うん。」弘樹は大きなかばんからポンプを取り出して、川の水を水槽にシュコシュコと移しだした。水槽の6割くらいまで水が入るとコイマンはむなびれを動かした。

「そのくらいでいいですね。そんなに長旅にもなりそうもないでしょ？重たいやろうし、そのくらいで。」

「わかった。」そういつて弘樹はかばんから網を取り出した。

「おにいさん用意がいいですね。ほなどうぞ。」コイマンが言い終わると、弘樹はゆつくりと網ですくい上げて水槽に移した。

「じゃあ、行こう。よろしくお願いします。コイマン。」

「はいな。これからどれくらいかかりますの？」

「歩いて5分くらいかな。結構近いでしょ？」しっかり水槽を両手で持って弘樹は歩き出した。

「お、意外と近いですね。あ、せや、おにいさんは何て言うてその子を誘いはったんですか？」

「え！？」弘樹は動揺して水槽を少し揺らしてしまった。

「おっとっと。」コイマンはすべてのひれを上手く使ってバランスを取った。

「あつ、ごめん！コイマン。」上から覗き込んで弘樹は言った。

「いや、唐突にあんな事聞いたワイも悪いんですわ。すみません。」

コイマンは水面から口を出してパクパクした。それからしばらく歩いて、またコイマンは質問した。

「あ、待ち合わせ場所はどこですか？公園とかですか？」

「家だよ。」

「家？」

「そう、木村さんの家。」

「うそーん。まさか家まで押し掛けるとは。やっぱり想いの大きさがすごいすなあ！」

「いや、僕だつてもう1度話したいから公園でもって言ったんだけど、今日は家庭教師が来る日だから家にいなきゃ駄目だつて言われました。それかまた違う日にするかどうかって。」

「あゝそうやったんですか。」

「うん。でも、コイマンと約束してたし、少しの時間だけだから家に行かせてってお願いしたらオツケーもらえて、それで家に押し掛けるみたいになっちゃいました。」

「なるほど。でも、なんか話を聞いてる感じでは嫌われてそうでもないですし、フラれた理由がわかりませんなあ。」独り言のようにコイマンは呟いた。

「ああ。うゝんとね、野球部の人に3日前に告白されて、まだ返事してないんだけど、前からちょっと気になってた人だから付き合おうと思ってるんだ。って言われたんだ。だから、僕の方が先に告白してたら、また違ってたかな？って思つて、そしたら余計に悲しくなつてきて、昨日の感じになっちゃったんですよ。」

「ほうほう。そうでつか。」とコイマンが言い終えた時に弘樹の足が止まった。

「着いた。」そう言つて水槽をそつと地面に置いた。そして、深呼吸をしてインターホンを鳴らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6210p/>

コイマン～鯉の恋を手伝います～

2011年3月24日19時55分発行